The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Thorsten Botz-Bornstein, ”Place and Dream : Japan and the Virtual”, Rodopi (Amsterdam, New York), 2004
Author(s)	織田, 和明
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 151-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51237
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Thorsten Botz-Bornstein
Place and Dream: Japan and the Virtual
Rodopi (Amsterdam, New York), 2004

織田 和明

著者について [1)]

著者トルステン・ボッツ＝ボルンシュタインは美学と多文化哲学を専門とするドイツ出身の哲学者である。現在はクウェートにあるガルフ科学技術大学で哲学の准教授を務めている。研究の特徴としては「スタイル、遊び、夢」をテーマに研究を行っていることが挙げられる。多文化哲学の専門家として、日本、ロシア、中国などの思想を援用し、空間論、映画論、文化論、身体論などの分野から、そのテーマに対して多角的にアプローチをしている。最近は女性のヴェールなどの身体装飾の研究を行っていて、近日中に“*Tattoos, Nudity, Veils: The New Feminine Aesthetics*.”を出版する予定である。

本書の全体像

『場所と夢　日本とヴァーチャル』は2004年に出版された、近代日本思想研究を基礎にして夢とヴァーチャルについて研究する、ユニークな空間論集である。先に全体像を確認しておくと、本書は西田幾多郎研究と西田以外の哲学者の研究の二方面から研究を進めている。一方は西田の「場所」の概念によって結晶化された日本の空間に関する考え方の研究を軸として、西田の概念である「純粋経験」や西田の「国体」に対する考えについての考察、そして西田とミハイル・バフチンの「対話主義」、そしてルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの「生活形式」との比較などを通じて夢やヴァーチャルについて研究している。もう一方は九鬼周造の「いき」と偶然性、木村敏の「あいだ」など西田以外の日本の哲学者が提示した概念の研究から夢とヴァーチャルについて検討している。西田論が全体の大きな割合を占めているが、九鬼周造の「いき」論と「偶然性」論にもそれぞれ一章ずつ割り当てられていて、西田の次に重要な位置を占めている。

この著作全体を通じて、コンピュータによって構築されるヴァーチャル・リアリティーが伝統的な日本のヴァーチャルについての思想（「場所」や「間」、「あいだ」など）の立場から批判的に検討されている。ヴァーチャル・リアリティーによってグローバル化による世界の画一化とそれに伴う人間の自然からの疎外の原因が引き起こされていると、著者は主張する。本書に収められた諸論文は現代のヴァーチャル・リアリティーを伝統的な日本のヴァーチャルについての思想と対比することによって、グローバル化による画一化に抗い、多様性を保持するための理論的ベースを探究するものとなっている。

本書の構成

本書は序文、イントロダクション、7つの章、後書きそして補遺によって構成されている。まずは本書の全体を概観しよう。

イントロダクションの「空間とヴァーチャル：東西の比較」は本書の全体像や著者のねらいを簡潔に説明している。第1章「西田幾多郎の純粋経験のゲームのような夢のような構造」は西田の「純粋経験」と経験を統合する場所としての夢との類似性を論じている。第2章「いき、スタイル、痕跡」はドイツ哲学の解釈学の系譜とその九鬼への影響を確認し、そして九鬼とハイデガーのお互いの哲学の理解状況の検討、そして九鬼とデリダとの比較を行っている。第3章「偶然性と「夢の時間」」は九鬼がブートルー、ラベッソン、ベルクソン、アランなどの戦前のフランス哲学からの強い影響を受け、それらと禅宗に親近性を見出すことで日本的な「偶然性」の思想に至ったと論じている。第4章「「私」と「汝」」は西田とバフチンの思想を対比することで他者とのコミュニケーションのあり方を検討している。第5章「間（引用者註：ま）、場所、あいだ」は大橋良介の『切れの構造　日本美と現代世界』などをにしながら「間」を、西田の「場所」を、そして木村敏の「あいだ」を取り上げ、ヴァーチャル・リアリティーの発達によってグローバル化が進められる時代における日本の空間概念のポテンシャルを考察している。第6章「西田幾多郎とヴァーチャルな身体の政治」は西田における「国体」や「歴史的身体」について考察しながら私的なヴァーチャルと公的なヴァーチャルを区別している。第7章「西田とウィトゲンシュタイン」は西田の「純粋経験」とウィトゲンシュタインの「生活形式」を比較し、「無目的な文化のスタイル」としての「生活形式」が、特定の文化に生きる人々の純粋経験に基礎を持っているとして、そこにグローバル化の時代における文化間コミュニケーションの可能性を見出している。後書き「「述語の論理」とヴァーチャルなスタイル論」はスタイルを「場所」、そして「絶対無」に近いものとして捉え、スタイルにおいて個人の行動と一般の歴史の矛盾した合一がなされると結論付けている。補遺の「夢のような空間知覚の8つの西洋のパラダイム」はプラトンのコーラを筆頭に西洋哲学の8つのパラダイムについて夢を軸に検討している。

多文化哲学の試み

著者は自身のウェブサイトに「スタイル、遊び、夢」という項目を設け[2)]、そこに自身のアビリタシオン論文からの引用を掲載している。それによると「スタイル－遊び－夢」は三者が相互に連関を持って三角形を構成している。そして、この三者は偶然性と関連している。この2点は明記されているが、それ以外のことはすべて疑問文で書かれている。本書においても、この三者が鍵概念として登場し、それらの関係については各論文の中で部分的には言及されているが、完全な解明は行われていない。まだ研究途上にある「スタイル-遊び-夢」を紹介するよりはむしろ、ここでは比較哲学の試みとして、第４章で行われている西田とバフチンの比較にしぼって著者のユニークな挑戦を紹介したい。

この章ではバフチンの「対話性」と西田の「私」と「汝」についての議論を比較検討している。この両者を比較することは一見すると非常に奇妙に思われる。しかし、バフチンと西田は「私」と「汝」の関係を抽象的なものではなく具体的な「文化的空間」に関係する問題としている点で共通していて、両者は比

較可能であると著者は考えている。つまり、自然科学的な空間ではなく、「私」と「汝」が生きる具体的な空間を定義しようとした点で両者は共通しているのである。

バフチンと西田は「私」と「汝」の関係について、どちらも他者の知覚の矛盾した本質を強調していると、著者は考えている。まずはバフチン解釈をみてみよう。ここで注目されるのは「対話性」や「ポリフォニー」といった概念から抽出されるバフチンの他者論である。バフチンは「対話性」において自己（作者）と他者（登場人物）の境界を曖昧なものと考えるが、自己と他者が一体化することは否定する。そして自己（作者）と他者（登場人物）の間で終わりのない対話が続けられると考える。この対話は小説家と作品中の登場人物の関係のみならず、現実の人間関係にも適応される。それゆえ、バフチンの「対話主義」の他者論において「私」が「汝」を真に理解する方法は、対話において「私」が「汝」に応答することであると、著者は解釈する。

この考えは西田の「私」と「汝」についての考えと近い。西田というと主客合一の側面が強調されがちだが、場所の論理に達してからの西田は、主客が区別されていながら、しかも合一していることを要求する。そして、場所において「我」は「汝」に、「汝」は「私」に、応答することによってお互いの存在を知り、相互にその存在のあり方を規定しあう。

まとめると、バフチンと西田はどちらも「私」と「汝」が一体化しつつも、常に区別されていること、そして「私」と「汝」は相互に応答しながら自己を規定していること、この点で共通していると著者は考えている。

第4章は西田とバフチンの他者論を比較し、それが非西洋的な特徴を持っていると結論付けるに留まっているのだが、イントロダクションにおいて、この西田とバフチンの議論がコンピュータ上の抽象的な空間における「自己」と「情報と化した他者」との間のコミュニケーションに対する批判になると述べている。著者の主張は出版された当時であればある程度の説得力があったかもしれないが、技術の発達によってSNSなどのコンピュータを介したコミュニケーションが精度を増し、ヴァーチャルの向こう側にいる「汝」の現実を生き生きと感じ取ることも可能になった現在では、やはり説得力を欠いている。しかし、「汝」と対話することを拒絶し、一方的に「私」に従わせようとする事例はコンピュータを介したコミュニケーションにおいても現実のコミュニケーションにおいても、枚挙にいとまがない。著者が主張する「場所において自己と汝が対話すること」は本質的にはその重要性を保っているといえるだろう。

日本思想研究の観点から

次に、日本思想研究の観点から本書について検討しておきたい。ここではその問題が最も顕著な九鬼周造の取り上げ方について論じる。

著者は日本語圏以外ではさほど知名度が高くない九鬼周造について論じるにあたって、九鬼周造の受容状況に配慮した上で九鬼を紹介している。多くの欧米の読者が九鬼を始めて知るのはハイデガーが戦後に著した対話編「言葉についての対話」[3)]においてである。そこで九鬼に興味を持った人が次に手を取るのは、本書が出版された当時であれば『「いき」の構造』や『偶然性の問題』の翻訳版、Light(1987) [4)]、

Heine(1991) [5]、Pincus(1996) [6]そして大橋良介による諸論文などの二次文献になる。これらの二次文献を総合すると、九鬼は「ハイデガーの影響を強く受けた、戦前から戦中にかけて、ナショナリズムを煽るかたちで日本の美学を論じた人物」として読者の前に現れる。本書の貢献として、これらの先行文献が与える偏った九鬼周造像の修正を試みていることが挙げられる。

著者による修正点は主に3点である。まず、ハイデガーが「言葉についての対話」で示している「いき」の概念が、おそらくはドイツ語で書かれた能の研究書[7]に依っていて、九鬼が提示したものとは異なっていること、次に九鬼は美学者であるというよりもむしろ哲学者であったこと、そして、ピンカスが主張したように、九鬼の美学にナショナリズムを煽る側面があったことを否定することはできないにしても、九鬼哲学はそのような政治的な側面だけで論じ尽くすことができるようなものではないこと、である。ハイデガーの間違いについては先行文献が既に指摘しているものではあるが、著者はそれをわかりやすくまとめている。いずれの指摘も日本語圏の九鬼の読者にとっては当然のことのようにも思われるが、非日本語圏の読者がより正確に九鬼の思想を理解するためのよい手助けとなっている。

しかし、著者が描く九鬼周造像には不正確な点、同意できない点もある。著者は九鬼を西田の弟子であると述べ、生活上においても思想上においても両者は非常に近い関係にあったとしているが、それは正しくない。九鬼が西田の著作を読み、西田を深く尊敬していたことは事実だが、九鬼は西田から直接指導を受けたわけではないし、京都帝大に就職したのも西田の退官後のことである。九鬼と西田の間にはある程度の距離があることは否定できない。

著者は九鬼と西田の思想上の接点を禅宗に求めている。そして、九鬼を『偶然性の問題』において、ベルクソニズムを禅宗と、カントの超越論的哲学を武士道と、結び付けた上でさらに両者を総合しようとした人物だとしている。この解釈を支持することは難しい。伊藤(2014) [8]が詳細に論じているように九鬼は仏教思想から影響を受けているが、それを特に禅宗に限定する理由はない。禅の思想と九鬼哲学に近さが見出せるかもしれないが、少なくとも、それは著者が考えるほど自明ではない。九鬼は仏教の特徴を「諦め」に集約するが、これは漠然と大乗仏教全体の特徴を述べているものと判断する方が適切であろう。次に武士道に関して言うと、確かにポンティニー講演において九鬼は武士道を永遠に達成しない理想に向かって努力し続けることと定義し、それをカントの善意志についての思想と同じものだと述べている。しかし、この武士道の定義はあまりに抽象的であり、一般的な武士道の定義とはいえない。九鬼が武士道をカントの倫理思想と結びつけているとはいえ、それをカント哲学全体と結び付けることはあまりに安易である。そして、著者が主張するように『偶然性の問題』において九鬼が武士道と仏教の倫理の統合を試みていることはないように思われる。そもそも『偶然性の問題』では武士道は言及されていない。九鬼の武士道と仏教の倫理と関係する意志の問題は第二章の仮説的偶然の目的的偶然の議論などで扱われてはいるが、そこで仏教の「意志を廃して諦めること」と武士道の「永遠に達成しない理想に向かって努力し続けること」の統合が試みられていると解釈することは難しい。

この誤読の原因は「伝統的な日本文化」を多く扱っているポンティニー講演や『「いき」の構造』、そして西田と禅宗を重視し過ぎていることにあるだろう。そのために『偶然性の問題』の体系性や「原始偶然」、

「邂逅」といった重要なポイントがほとんど無視されている。その結果、九鬼が分析した様々な偶然性が恣意的に組み合わされ、偶然性と「いき」と夢が不用意に結びつけられてしまっている。『偶然性の問題』は基本的には西洋哲学と東洋思想の両方をベースにして全世界で通用する普遍的な哲学を目指したものであろう。著者のように「伝統的な日本」を過剰に読み込むことは『偶然性の問題』の過小評価を招くように思われる。

おわりに

夢とヴァーチャルというテーマを軸とした日本思想研究や西田とバフチン、ウィトゲンシュタインの比較など、本書はユニークな試みを多く行っている。この点は日本思想の応用的な研究の試みとして評価されるべきである。しかし、日本思想の理解としては不正確な部分が多いことも併せて指摘しなければならない。とはいえ、より正確な情報は本書出版後の研究によって提供されているし、今後もされていくだろう。それよりもむしろ、本書によって提示された日本思想の現代の問題への応用可能性や、他の哲学者との比較可能性に目を向けるべきであり、本書の大胆な挑戦に敬意を表したいと思う。

註

1）著者のウェブサイトに基づいている。
URL: http://www.botzbornstein.com/
2014 年 10 月 9 日閲覧。

2）同上

3）高田珠樹による翻訳がある。ハイデガー、(2000)、『言葉についての対話―日本人と問う人とのあいだの』、高田珠樹訳、平凡社ライブラリー

4）Light, Steven. 1987. *Shûzô Kuki and Jean Paul Sartre : Influence and Counter-Influence in Early History of Existential Phenomenology*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press.

5）Heine, Steven. 1991. *A Dream Within a Dream*. Bern and New York: Lang.

6）Pincus, Lesley. 1996. *Authenticating Culture in Imperial Japan: Kuki Shuzo and the Rise of National Aesthetics*. Los Angeles: University of California Press.

7）Benl, Oscar. 1953. *Seami Motokiyo und der Geist des Nô-Schauspiels : geheime kunstkritische Schriften aus dem 15. Jahrhundert*. Wiesbaden: Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur.

8）伊藤邦武、(2014)、『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』、ぷねうま舎。